

KINGCA WEEK 2023 に参加して

日本大学内科系消化器肝臓内科学分野 高須 綾香

この度、日本胃癌学会より参加助成をいただき、2023年9月11日～13日に韓国ソウルで行われた KINGCA WEEK2023 に参加させていただきました。

計 825 名の参加者のうち、205 名が海外からの参加とのことで、本学会のアジアを中心とした海外からの注目度の高さ、ならびに COVID-19 の影響が落ち着いてきたということ強く感じさせました。

私は現在医師 10 年目で、大学では消化器内科医として早期胃癌の診断・治療また、胃癌に関する臨床研究に携わっております。参加者の多くは外科の先生方である学会ではありますが、我々消化器内科医からしても、大変充実した内容であり、日々刺激を得るものでした。

初日の Plenary Lecture では Dr. Keun Won Ryu より SENORITA trial の歴史と概要、今後の展望を拝聴しました。そして、当科の後藤田卓志教授が JS Min Memorial Lecture で ESD をはじめとした早期胃癌の治療と診断の歴史についての発表をされました。諸先生方のご講演から、この数十年間で胃癌の病態発見や治療・診断は多くの進歩を遂げたことを改めて実感いたしました。

私は、Endoscopic treatment の口演セッションで「Examination of characteristics and endoscopic treatment in early gastric cancer according to different time periods」という発表をさせていただきました。本研究では、早期胃癌の患者背景、背景胃粘膜、病理組織を、時代にわけて検討をおこないました。英語のプレゼンテーション自体もとても緊張しましたが、質問も多くいただき、会場全体で熱いディスカッションとなり大いに盛り上がりました。そして大変光栄なことに Oral Presentation Award を頂戴しました。

今回の学会で一番感じたことは、日本に次ぐ胃癌大国である韓国は、直面している問題点や注目点が日本と類似しているということです。例えば、両国ともに胃癌に対しての検診システムが存在していますが、高齢社会による医療費の増大や *H. pylori* 未感染の割合の増加という時代的・社会的背景を抱え、今後どのようなスクリーニング方法が望ましいかという課題は、両国に共通していました。また内視鏡治療に関しても、ESD だけではなく、EFTR や LECS は日本と同様、注目のおかれている分野でした。今後のさらなる胃癌の診断や内視鏡治療の発展には、胃癌大国である韓国と日本のコラボレーションは不可欠であると感じました。

また、私と同年代の医師も多く参加しており、Gala Party や観光を通じて、多くの海外の先生方と交流をもつことができました。異国の地で、その文化や食事を楽しみながら国際交流ができるのは、国際学会ならではの醍醐味だと思います。

そして、多くの参加者にとって英語が第二カ国語であり大変聞き取りやすく、質疑応答もとても温かい雰囲気でした。若手が英語プレゼンテーションに挑戦するのに絶好の機会であると感じました。

最後になりますが、今回このような機会をいただきました日本胃癌学会理事長 掛地吉弘先生、国際委員会委員長 竹内 裕也先生、日本胃癌学会の関係者、事務局の方々に厚く御礼申し上げます。



口演発表の風景



発表セッション後の記念撮影



表彰式にて（筆者は中央）